

大学入学試験に用いた情緒性検査の 検討報告

岡 部 弥 太 郎
古 沢 厚 子

本稿において、岡部は情緒性検査の作製と実施に責任を持つものであり、古沢は岡部の若干の指導の下に、主としてこの検討報告に責任をもつものである。

1. この研究の意義と目的

ひとりの学生が大学の診療所に睡眠薬をもらいにやってきた。このことは組織としての大学にはなんの関係もないことであるかもしれない。しかしもしも大学において、ひとりひとりの学生に注意がむけられており、個人としてはまったく真面目な問題をもつそれぞれの生きている人格というものが考えられているならば、こうしたささいな出来事も無関心ではすまされなくなる。

大学は単なる知的な面での学生に対する働きかけの場所ではない。学生もまたひとりの全体として人間であるからには、一つのまとまった人格としてとり扱われなくてはならない。「個人の人格をもっとも効果的に発展せしめ、社会においてもっとも興味ある健全な有益な生活へと導く条件と影響を保護し、後援し、促進する⁽¹⁾」ことが精神衛生の目的とされてきたが、このことはまさに教育の目的と結び付いてくるものと思われる。教育はよりよく適応することのできる個人、自己の能力を充分に使用し、自分のかくされた可能性への洞察をもち、社会的環境の中で有効に生きていくことの出来る個人の発達と訓練を促すものである。これが大学における学生の指導、相談が重要視されてくるゆえんであると思う。そしてこのため

には、どのような人格がもっとも有効に自己を社会の中に実現するか、どのような人格はどこに不適応の問題をもちやすいかということが考えられなくてはならない。現実の問題として、大学は学生のもっている問題の発見とその処置をどうするかということに関心があり、更に積極的に民主社会の市民に期待されている成長した自律的な性格の涵養が目指されなくてはならない。従ってもしも適応した人格と不適応をもたらすような人格とを識別し、さらにその問題の所在をきわめることが出来るならば、より早いうちに問題をとりのぞき、未然に不適応の発生を阻止し、不適応への可能性ある人格を、より高度の適応へと導くことへの道がひらけるかもしれない。情緒性検査は、この問題への一つの試みとして、不適応者予見の目的をもってとり上げられたものである。

情緒性検査は第一次世界大戦中、米国において、軍隊生活の圧力と緊張の中で満足に適応しうる能力を診断する必要が強く要請されるところから **Woodworth, Roberts** により、精神神経症的傾向をもとにして作られたのが始まりである。⁽²⁾ ここでも人格の一部の根柢をなすといわれる情緒性のあり方という面から、大学においての不適応者を識別しようとするものである。適応した人格とは、調和がとれ自らも幸福感情をもち、能率性をもつものと考えられる。⁽³⁾ 情緒の円満な発達⁽³⁾は、調和のとれた人格の基本的特質である。力動的心理学の立場からいえば、個人が行動を解発するのは状況の規定因と共に個人内部の衝動によるものであるが、この衝動水準は主体内部の情緒と密接に関係している。情緒が不安定ならば衝動に働く力にたえず変動があり、行動が促進されたり、抑制されたりして統一されないものとなる。情緒性の不安定さは従って、人格の統合性をかき、行動が解発されずに余計な緊張状態をもたらしたりして、不適応の状態を導きやすいものとする。情緒安定性とは他の検査の因子分析の結果からではあるが、具体的には循環性傾向、抑鬱性、神経質傾向、思考的内向あるいは外向、社会的内向あるいは外向、客観性、劣等感の有無、協調性などが関係しており、これらを因子として示される情緒不安定性の主要特徴は概して

不適應な性質を意味しているといわれている。⁽⁴⁾この検査はこうした情緒性を前提として、人が緊張場面において、満足な精神調整ができるか否かということから、未知の環境に対する適應力を測定するものとして、ある働きをしようとする。

この研究の目的は、実際にこのテストを用いて、大学在学中の、問題とみなされる学生を予見することができるのだろうか、この検査と実際のケースとは果して関係があるのだろうかという点を検討することにある。テスト結果の資料は、第1に、テスト得点は実際の問題ケースを見つけ出すのに重要な手がかりとなりうるか、第2に、テスト項目は問題ケースの発見に果して妥当なものかという2つの問に対して答をみつける方向からまとめたものであるが、ここでは情緒性検査にあらわれた問題学生という点に注意してみていきたいと思う。

2. 研究の方法

この研究は二つに大きく分けられる。第1には先ず、この情緒性検査施行結果の統計的処理であり、第2には、第1の結果と実際問題ケースとの関係の検討である。第1は539名の大学入学予定者である被験者をもとにしてそのテスト得点の分布、中心傾向、テストの信頼性、テスト項目の妥当性などを検討し、テストのもっている特長と、また一方では、テストによって示されたテスト対象の全体を明らかにした後、つぎにテスト結果とは独立して集められた実際の問題ケースとそれに対応する非問題ケースの両群間の比較をとおして、テスト結果との関係をみようとしている。

3. 情緒性検査の施行

(1) 質問紙

情緒性検査はすでに今までいくつが出されているがここで用いられたのは新しく構成されたものである。このテストは短い質問の形で作られ2つの尺度を含んでいる。第1は、60項目からなる情緒安定度を測定しようと

する尺度（E尺度）であり、第2はテストに対する被験者の態度を測定しようとする15項目からなる有効性検証尺度（L尺度）である。両尺度とも得点の大きさによって判別しようとするものであり、E尺度では高い得点を得る者程、情緒性は不安定であり、得点の低い者程、安定していると仮定する。L尺度については同じく得点の高い者程、テストに対してありのままでない態度が入ってくるのではないかと考える。⁽⁵⁾

質問に対する応答はすべて、「はい」「?」「いいえ」の3つに分けられ、質問の内容が自分のことのようにであれば「はい」に回答し、反対であれば「いいえ」に回答するようになっている。E尺度については、情緒不安定性を示すと思われる項目に「はい」（45項目）あるいは「いいえ」（15項目）をもって答えたときに1点を与え、その逆に対しては0点を与える。L尺度については普通一般にはしないようなのぞましい行動に対して肯定的な答（答の仕方では「いいえ」となる）をしたとき1点を与え、それ以外には0点を与える。? 応答は採点に関係しない。質問項目は項目分析の項を参照されたい。

(2) テスト対象

資料は1956年から1958年の3ケ年にわたって国際基督教大学において毎年その年にICUの入学試験を受ける学生に施行され集められたものである。ここで扱う対象は後の適応を追跡しようという理由で、そのうちからICUに入学を許可された539名に限定し、とることにした（第1表）。これらの大学入学予定者の年令は検査当時17才から24才の範囲にあり、17才

入学年度	総検査数	使用検査数		検査日
		総数	男子 女子	
1956	532	169	98 71	から19才が全体の80乃至85%を占めている。検査月日は1956年1月21日、2月28日、1957年1月19日、2月27日、1958年1月18日、2月26日である。検査はICU入学試験の第1日目の一番はじめに施行される。検査場は普通の教室であり、80乃至100名の被験者が
1957	325	177	100 77	
1958	435	193	118 75	
計	1292	539	316 223	

一せいにこのテストをうけた。

(3) 情緒性検査施行の結果及び考察

得点の分布

539名の被験者のE得点の分布は第2表のようになった。百分率度数分布曲線で示したのが第一図である。テスト作成時の仮定では、E得点は0から60点の範囲をもつものと考えられていたが、実際には低得点の方に偏り、0から32.5点の間で、大体、正常曲線に近い形を示した。

L得点の分布は第3表及び第2図である。テスト作成時の仮定では0から15点の範囲であったが、実際の分布も0

第2表 E得点度数分布及び百分率度数分布

E得点	全対象		男子		女子	
	度数 (名)	%	度数 (名)	%	度数 (名)	%
30—31	1	0.2	1	0.3	—	—
28—29	1	0.2	1	0.3	—	—
26—27	1	0.2	1	0.3	—	—
24—25	4	0.7	4	1.3	—	—
22—23	6	1.2	5	1.6	1	0.4
20—21	16	3.2	9	3.2	7	3.1
18—19	19	3.5	11	3.5	8	3.6
16—17	28	5.2	13	4.1	15	6.9
14—15	43	8.2	26	8.2	17	7.6
12—13	40	9.1	27	8.5	22	9.9
10—11	67	12.4	37	11.7	30	13.4
8—9	80	14.7	43	13.6	37	16.6
6—7	93	17.1	56	17.4	37	16.6
4—5	82	15.0	50	15.8	32	14.3
2—3	40	7.4	26	8.2	14	6.3
0—1	9	1.7	6	2.0	3	1.3
計	539	100.0	316	100.0	223	100.0

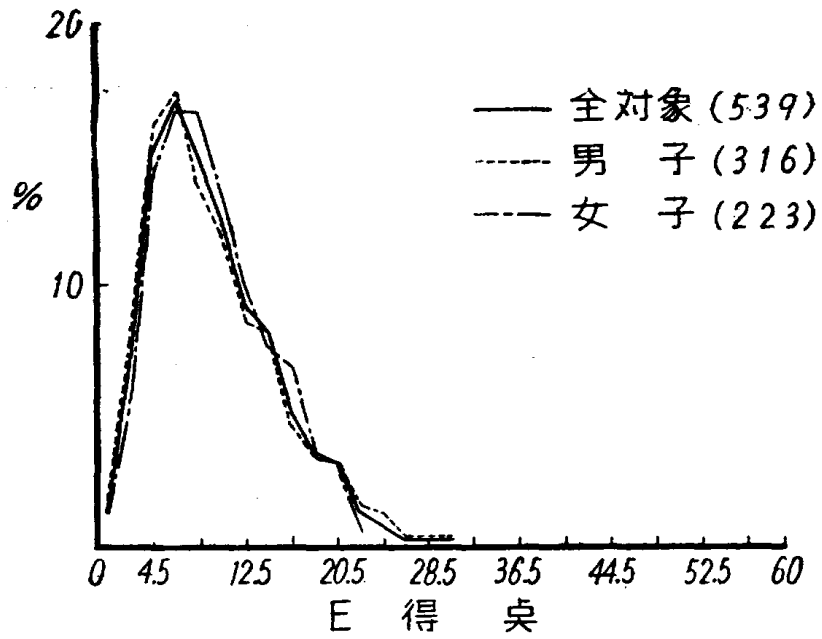
から13点にわたっている。全体としては、やや低得点への偏りがみられる。

中心傾向及び散布度

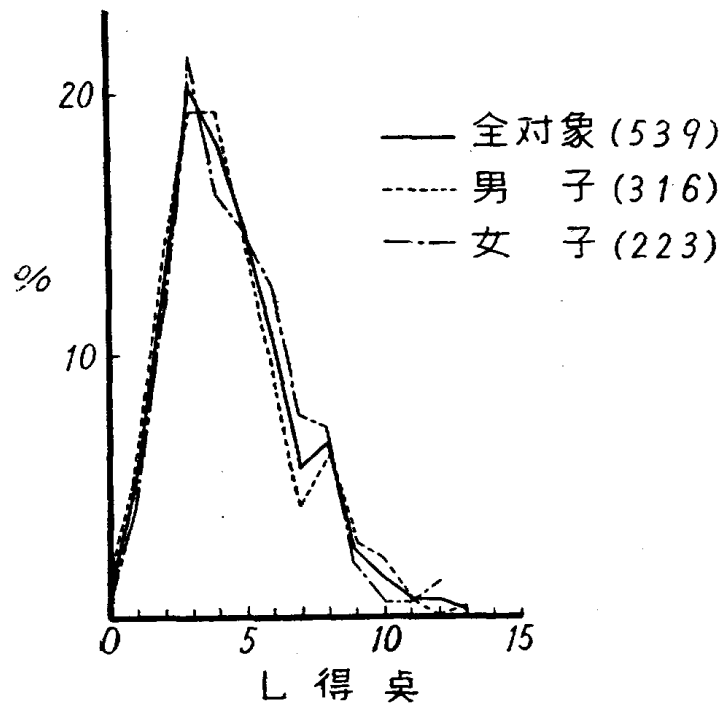
第4表の通りである。E得点の平均は男子9.6、女子9.5、全体では9.4であった。この結果からは、5%の危険率では男女間の差は有意ではなかった。得点のひろがりについて、標準偏差を考えると、男子5.6、女子4.8、男女共では5.4であり男女間の差は有意ではなかった。この結果からE得点は男女共に、その母集団では同じような分布の状態を示していると考えられた。3つの異なる入学年度については、平均、標準偏差とも有意水準を5%にとるかぎり差があるとはいえない。すなわち入学年度間には、得点の分布に大きなちがいはないものと考えられた。

L得点については第5表の示すとおりである。平均は男子4.3、女子

第1图 E得点百分率度数分布图



第2图 L得点百分率度数分布图



第3表 L 得点度数分布及び百分率度数分布

L 得点	全対象		男子		女子	
	度数 (名)	%	度数 (名)	%	度数 (名)	%
13	1	0.2	1	0.3	0	0.0
12	3	0.6	0	0.0	3	1.3
11	3	0.6	2	0.6	1	0.4
10	8	1.5	7	2.2	1	0.4
9	13	2.4	9	2.8	4	1.8
8	35	6.4	19	6.0	16	7.2
7	30	5.6	13	4.1	17	7.7
6	57	10.6	29	9.2	28	12.6
5	79	14.6	46	14.6	33	14.8
4	97	18.0	61	19.3	36	16.1
3	109	20.2	61	19.3	48	21.5
2	69	12.8	44	14.0	25	11.3
1	28	5.2	19	6.0	9	4.0
0	7	1.3	5	1.6	2	0.9
計	539	100.0	316	100.0	223	100.0

4.5, 男女共では 4.4 であり, 男女間の差は有意ではなかった。標準偏差は男子も女子も 2.3 であり差はないと考えられた。入学年度間についても平均, 標準偏差共に男女間の差は有意ではなかった。L 尺度についても, その得点の分布は男女別の差, あるいは施行年月の差に関係ないものと思われる。

テストの信頼性

一般にテストの信頼性は “Reliability of any set of

measurements as the proportion of their variance that is true variance”⁽⁶⁾ と定義され, テストの信頼度とは同じテストを同じ人々に独立に 2 回繰り返し施行できたものと仮想した時, 1 回目の測定値と 2 回目の測定値との間に得られるであろう相関係数の推定値で, 測定値の安定性を示す一つの指標である。この信頼度は次のような 3 つの観点から求めることができ, 信頼性を検証する。1, 内的整合的信頼性 (internal consistency

第4表 E 得点の代表値及び散布度

	全対象 (539)	性 別		入 学 年 度 別		
		男子 (316)	女子 (223)	1956 (169)	1957 (177)	1958 (193)
最 頻 値	6.5	6.5	6.5	—	—	—
中 央 値	7.6	7.5	8.0	—	—	—
平 均 値	9.4	9.6	9.5	9.6	10.0	9.3
平 差 均 値 検 定		$t=217$ $df=537$		$F=.87$ $n_1=2, n_2=536$		
標 準 偏 差	5.4	5.6	4.8	5.2	5.6	5.1
標 準 偏 差 の 差 の 検 定		$F=1.36$ $n_1=315, n_2=222$		$x^2=1.34$ $df=2$		

第5表 L得点の代表値及び散布度

	全対象 (539)	性 別		入 学 年 度 別		
		男 子 (316)	女 子 (223)	1956 (169)	1957 (177)	1958 (193)
最 類 値 中 央 値 平 均 値 平 均 値 差 の 検 定	3.0	3.0	3.0	—	—	—
	3.6	3.5	3.8	—	—	—
	4.4	4.3	4.5	4.4	4.5	4.4
		$t=1.54$ $df=537$		$F=.245$ $n_1=2. n_2=536$		
標 準 偏 差 標準偏差の差の 検定	2.3	2.3	2.3	3.0	2.5	2.3
		差なし		$x^2=5.112$ $df=2$		

reliability), 2, 平行系列信頼性 (alternate form reliability), 3, 再検査信頼性 (test-retest reliability) である。

ここでは折半法を用いて内的整合的な信頼度を求めることにした。E尺度, L尺度共にそれぞれの項目を偶数項と奇数項とに分け, 二系列の得点の相関を偏差積率相関係数とし得, それを Spearman-Brown の予言式にあてはめて信頼係数 r_{tt} を得た。その結果, E尺度は $r_{tt}=.76$, L尺度は $r_{tt}=.68$ であった。一般に inventory 形式の検査の信頼性は高いといわれており, 折半法では .8 ないし .9, 低くなる傾向があるといわれる再検査法でも .6 から .7 の信頼係数を示す場合が多いことから考えると, この結果は必しも高いものとは思われない。⁽⁷⁾ 信頼性は被験者の年齢が高まる程安定し, テストの信頼度が予想しうるようになる。このことは, 被験者の成長と共に自己の状態を診断し, 判定する個人の能力が発達するためと考えられる。成熟しつつある人は, いつでも自分の適応に対して多くのことを考えるため, そうした問題を報告するにも, 自己の状態や適応に注意をむけていない年若い被験者よりも優利な位置にあるものと思われる。このテストでも, 被験者は大学入学予定者であるのでここに出てきている信頼係数は一応, このテストのもつ信頼性を示すと考えられる。

テストの信頼性はその他種々の要因によって影響される。⁽⁸⁾ 第一にはテストそのものもっている因子, 第二にはテスト結果の操作に関係する要因, そのほかに個体的条件, 環境的条件などがあげられている。これらの点に

については、このテストでも当然吟味されなくてはならないが、ここでは省略したい。

テスト得点の信頼度（真の値の推定）

このテストによって得られるテスト被験者個々の得点自体、どの位確かなものであるかはさきのテストの信頼性と関係して問題になる。測定の標準誤差 (Standard error of a measurement) σ_e はテストの信頼係数 r_{ii} と $\sigma_e = \sigma_i \sqrt{1 - r_{ii}}$ (σ_i は得点の標準偏差) のような関係にあり、得点の真の値の信頼限界は信頼水準 α において $X_i + t_{\frac{1}{2}\alpha} \sigma_e \leq \tilde{X}_i \leq X_i + t_{1-\frac{1}{2}\alpha} \sigma_e$ で求められる。この場合 σ_i は未知数であるので、 s_i を用い測定の標準誤差も、 $s_e = s_i \sqrt{1 - r_{ii}}$ として求める。その結果 E 得点の測定の標準誤差は 2.65 であった。95% の信頼水準で考えると E 得点の真の値は各個人の得点の ± 5.19 の範囲にあると考えられる。L 得点は測定の標準誤差 $s_e = 1.75$ であるところから同じく 95% 水準においては真の得点は各個人の得点の ± 3.43 の範囲にあるものと考えられる。

以上の結果から或る個人の得点は E 尺度では上下 5 点の幅をもって考えられなくてはならず、L 尺度では上下 3 点の幅をもたせて、その得点を解釈した方がよいのではないかということが考えられる。このことは、各個人の得点のとりうる幅は比較的ひろく、現在得ている得点が他の機会には大きく動揺してくるという危険性のあることを示している。従って各個人の得点を解釈するとき、その得点の絶対的な信頼はさし控えねばならないものと考えられる。

項目分析

使用したテストはこのテストの前提、「二つの尺度各々の総得点、即ち E 得点あるいは L 得点はそれぞれその大きさによってこのテストが測定しようとする目的を満足させるものである」に基づいてこれを満足すると思われるような項目を常識的判断によってア・プリアリに選択し、構成したものである。従ってもしも経験的にも以下のようなことがいえるならば、このテストの項目ひとつひとつは実際にそれぞれの役目を果しているもの

と考えられる。いま全テスト対象のE尺度60項目、L尺度15項目に対する非通過率（E尺度については情緒不安定の状態を示すと思われる項目に対して肯定的応答，ならびに情緒安定の状態を示すと思われる項目に対する否定的応答の割合，L尺度については，普通一般の人ならば到底しそうな行爲を示すと思われる項目に対して肯定的応答をした割合）を調べた場合，いろいろな割合で出てくるものと考えられる。ところがかりに全対象の中から特に総得点の高い群と特に総得点の低い群とを抽出した場合，前述の非通過率の大きかった項目について高い得点のグループよりも低い得点のグループの方がより多く通過し，又非通過率の小さかった項目についても，高い得点のグループがより多くひっかかるというようなことがいえるならば，各項目は総得点との関係において，それぞれ高得点と低得点のものとを弁別しうるものと考えられる。したがって各項目はテストの総得点との相関において問題にされているのであるから各項目は全体として内的緊一性を期待するものとなる。但しもしもこのテストの中にいくつかの緊一でない要素を含んで全体として情緒の不安定性を示すものであるならば，この操作は必ずしも至当のものでないかもしれない。

一般には二つの規準グループを用いて総得点と各項目との関係をみるときに point-biserial r を用いるが，ここでは操作の能率上から考えてGuilford の図表を用い ϕ 係数算出による上下分析を行った。この方法は全対象における通過率が50%に近いことを前提としているのでE尺度では非通過率20~80%にある項目のみとり出すと20項目であり，上下分析の結果このうちの15項目は1%の有意水準で総得点との関係において弁別力がみとめられ，二項目は5%水準でみとめられた。のこり三項目の弁別力は疑問とされた。非通過率が極端に多かった項目1項目と極端に少なかった39項目については誤差が大きいため ϕ 係数だけからは 弁別項目とすることは危険であるが，そのうちの25項目は弁別能力の可能性がみいだされている。

L尺度については同じく ϕ 係数による上下分析で，全対象における非通過率 20—80 %をもつ5項目はいずれも1%の有意水準で弁別力がみと

第6表 情緒性検査の項目と項目分析の結果

(L) ……L尺度項目 それ以外はE尺度項目

N ……いいえと応答したとき得点となる項目

++ ……1%以下の危険率で弁別力ありとされた項目

+ ……5%以下の危険率で弁別力ありとされた項目

(+) ……弁別力をみとめてもよいかもされない項目

* ……弁別力なしとされた項目

(+)	1	私はいつも真実ばかりを話すとは限らない (L) N	はい	?	いいえ
++	2	私は時には人に話せないような悪いことを考えることがある (L) N	はい	?	いいえ
(+)	3	時には怒る (L) N	はい	?	いいえ
++	4	気分の悪いときには不機嫌になる (L) N	はい	?	いいえ
++	5	はじめから企ててではないが電車や汽車のキセル乗りをすることもあった (L) N	はい	?	いいえ
++	6	ささいなことをいつも気にやむ	はい	?	いいえ
++	7	人のいないさびしいところへ行って思う存分空想したい	はい	?	いいえ
(+)	8	暗い所を歩くのが非常にこわい	はい	?	いいえ
(+)	9	自分のやっていることについて人が何か言うと気にさわってすぐそのことをうっちゃる	はい	?	いいえ
++	10	人前ではすぐにあがってしまう	はい	?	いいえ
(+)	11	すぐにぶつぶつ不平を言う	はい	?	いいえ
(+)	12	すぐに感情を害する	はい	?	いいえ
(+)	13	議論の時にはことさらに反対したがる	はい	?	いいえ
(+)	14	気が小さくていつもくよくよする	はい	?	いいえ
++	15	引込思案である	はい	?	いいえ
++	16	一日中何もしないでぼんやりしてられる	はい	?	いいえ
++	17	物ごとにひどく凝(こ)る性分だ	はい	?	いいえ
(+)	18	とかく不平が多い	はい	?	いいえ
++	19	よく剛情だと言われる	はい	?	いいえ
(+)	20	気むずかしやだと言われる	はい	?	いいえ
	21	私は自分の母を愛する N	はい	?	いいえ
	22	母はよい人である N	はい	?	いいえ
	23	私は自分のやっていることについて研究したり読んだりすることが好きだ N	はい	?	いいえ
	24	自分も人並には他の人々から可愛がられている N	はい	?	いいえ
	25	まわりの人々とうまく折合うことが出来る N	はい	?	いいえ
(+)	26	えらい人を知っていると自分もえらそうに見えるの			

	で、そういう人と知り合いになりたい (L) N	はい	?	いいえ
(+)	27 知人の全部を好きだとは言えない (L) N	はい	?	いいえ
(+)	28 時々少し無駄話をする (L) N	はい	?	いいえ
(+)	29 選挙の時にはあまり知らない人に投票することがある (L) N	はい	?	いいえ
++	30 時には汚い冗談を言って笑うことがある (L) N	はい	?	いいえ
++	31 むっつりしているとされる	はい	?	いいえ
(+)	32 執念深いと言われる	はい	?	いいえ
++	33 気がきかないと言われる	はい	?	いいえ
++	34 この世の中を醜いものだと感ずる	はい	?	いいえ
(+)	35 他の人に対してすぐに敵意をいただく	はい	?	いいえ
++	36 外へ出ると皆が自分を注意しているように思う	はい	?	いいえ
(+)	37 他人がひどく悪口を言っているように思う	はい	?	いいえ
(+)	38 人から自分の胸中を見破られていると思って心を苦しめる	はい	?	いいえ
(+)	39 時々悪い考や恐ろしい考が頭の中に浮んで来てそれを払いのけることが出来ない	はい	?	いいえ
++	40 頭の中の考が駆けるように早すぎて言葉にあらわすことが出来ない	はい	?	いいえ
++	41 多くのことを計画しすぎるためにすっかり疲れてしまう	はい	?	いいえ
(+)	42 何かしようとする時によく手がふるえているのに気がつく	はい	?	いいえ
(+)	43 しじゅう体中がだるい	はい	?	いいえ
(+)	44 自分の読むものが今までのようには理解出来なくなった	はい	?	いいえ
(+)	45 睡眠が不規則で安眠出来ない	はい	?	いいえ
	46 血を吐いたということはない N	はい	?	いいえ
(+)	47 卒直ということはいつでもよいことだ N	はい	?	いいえ
	48 骨折って働くことが出来かつその意志のある者は成功すると思う N	はい	?	いいえ
+	49 私は他の人よりも敏感だと思う N	はい	?	いいえ
(+)	50 病気や負傷の時医者に見てもらふことを恐れない	はい	?	いいえ
(+)	51 時には毒舌を用いたくもなる (L) N	はい	?	いいえ

(+)	52	いつも新聞の社説を読むとは限らない (L) N	はい	?	いいえ
(+)	53	時々今日すべきことを明日に延ばす (L) N	はい	?	いいえ
++	54	自分の家での食卓の行儀は人中へ出た時ほどよくない (L) N	はい	?	いいえ
(+)	55	勝負ごとでは負けるよりも勝った方がよい (L) N	はい	?	いいえ
	56	しじゅう口の中が乾いているような気がする	はい	?	いいえ
++	57	私の行動の多くは周囲の人達の習慣に支配されている	はい	?	いいえ
(+)	58	いつも自分が悪いこと、間違っただけをいかにしてかしているように感ずる	はい	?	いいえ
	59	死んだ方がよいと思う	はい	?	いいえ
(+)	60	自分が不幸におちいるかも知れないと考えて悩む	はい	?	いいえ
(+)	61	人よりも精神を集中するのに困難のようだ	はい	?	いいえ
(+)	62	私の頭は何かしらおかしい	はい	?	いいえ
(+)	63	私の家庭はよその家庭にくらべて家族間の愛情が非常に少い	はい	?	いいえ
++	64	たいていの人は困難を切りぬけるためには嘘を言うだろうと思う	はい	?	いいえ
+	65	私は大ぜいの人と一緒にいられるという理由でパーティに行くのが好きだ	はい	?	いいえ
*	66	私はすっかり自主独立的で家庭のものから支配されるということはなかった	はい	?	いいえ
(+)	67	毎日のように私をびっくりさせるようなことが起る	はい	?	いいえ
(-)	68	自分の最大の戦は自分自身に対してである	はい	?	いいえ
*	69	私はロマンティックな物語よりも冒険的な物語が好きだ	はい	?	いいえ
*	70	私は自信が強い	はい	?	いいえ
	71	法律は守らなければならない N	はい	?	いいえ
	72	自分が正しいと思うことのために立ち上ることは必要だ N	はい	?	いいえ
	73	人生は生きるに値すると思う N	はい	?	いいえ
	74	私は自分の父を愛する N	はい	?	いいえ
(+)	75	私は自分の行動について責任をもつことが出来る N	はい	?	いいえ

められている。のこりの10項目については誤差が大きいため確実ではないが弁別能力の可能性はみられる（第6表）。

以上の結果からこのテストが情緒安定性という一つの特性を見出すために同質的な内容をもつよう考えられるならば、現在のままでは必ずしも十分な結果をもたらす項目から成り立っているとはいえない。従ってもしも、このテストを内的整合性の高いものにしようとするならば、現在の結果からはテスト項目の選別が大幅にされる必要が示唆される。しかしもしもテストの実用的価値を重視してこのテストを使って問題を察知するということを目的とするならば内的整合性は必ずしも問題発見のために有利になるとは限らず、それを厳密にするよりも、むしろ実際に用いて有効な項目の選別が重要になってくる。項目分析の結果のみをとって、妥当と思われない項目を省いてしまうことはテスト項目の減少をも免かれないから信頼性の低下ということも考えられ、できるだけ実用的で精度の高いものにするには実際ケースとの関係を検証することが必要な手続きとなってくる。

4. 情緒性検査と問題学生との関係

以上のように統計的に検討された情緒性検査は個々の学生をとり上げたとき、それらのケースをどのように明らかに表わすことができるであろうか。

学生のもつ問題は非常に範囲が広い。⁽¹¹⁾ Williamson と Darley が学生のもっている問題領域を六つに分類しているが、それらは生活のあらゆる面を含み関係している。⁽¹²⁾ しかしこうした問題の中で、特に検討を必要とするのは心理的要素の強くからみ合っている問題である。このテストの目的が表現的には精神神経症的徴候からそのパーソナリティの適応への可能性をみようとしているので、こうしたいろいろな問題の中でも特に神経症的徴候あるいは傾向を示すものを問題ケースの「問題」として取り上げようとした。ただその問題とする判断が、第三者の側からみて問題なのではない

かとみられたものを取り上げるという限界があるが、できるだけ本人自身が悩み、問題と自ら意識することのできたケースをここではとり上げようとした。

(1) 検討の方法

ケースの選定

問題ケースは1958年10月4日から31日までの約1カ月の間にわたって大学内の学生にもっとも多くの変渉を持つような機関の先生方7名から第三者的立場からみて問題があると考えられた、あるいは考えられる学生の氏名及びその主要な問題点を上げて頂いたものである。その結果65のケースが提供され、そのうちテスト結果のないものが5名あり、実際にケースとしての可能対象は男子32名、女子28名、計60名についてとなった。これらのケースは大きく分類して次のようである。

精神科医あるいはそれに準ずる専門家によって精神的障害の認められたもの 7
自分で心理的な問題を持ち、それを第三者に相談しているもの15
性格的に著しい特徴のみられるもの21
第三者の目からみて一般の学生とは変った言動が頻々とみとめられるもの 8
精神的なものからくると考えられている身体的疾患をもったもの	... 2
身体的障害をもっているもの 2
(このうちの一例は心理的問題を第三者に相談しており重複している) 資料が充分でないもの 6

これらのケースはひとつひとつが独特の意味をもつものであり、一律に取り扱うことはできず、また、資料提供者自身の規準も個々でちがうため、ここでとり上げる問題ケースは、情意的面における問題で確実な資料の得ることができ、問題の性質も比較的明瞭なものに限定することにした。その結果、男子18名、女子8名、計26名のケースが得られた。

1. 精神科医により精神病質的傾向があると診断されたもの 1

- | | |
|----------------------------------|------|
| 2. 精神科医により精神神経症と診断されたもの | …… 6 |
| 3. 自分で神経症的問題をもって悩み、相談にきたもの | …… 6 |
| 4. 神経症的傾向をもち退学あるいは死亡したもの | …… 3 |
| 5. 自から進んで自分の心理的問題について相談にきたもの | …… 4 |
| 6. 精神的なものから起ると考えられている身体的疾患をもったもの | …… 2 |
| 7. 特に学生として反社会的とみられるような行動を顕著にするもの | …… 4 |

対照群の設定

問題群との対比の関係から、できる範囲内で1対1に対応するような非問題群を作って比較してみることが考えられた。対照群は全対象から無作為に抽出され、普通一般の学生を代表するものが望ましい。そこでアルファベット順の名簿を用い、各問題ケースから同性のもの3名をつづけてとり、原則としては第一番目の学生を2名の判定者に次の規準で判定してもらった。即ち、特に強くフラストレイトされたところもなく、極度の緊張もなく、学生生活をうまくやっているというのを最低の規準として、のぞましくは豊かな幸福感情と高い社会的能率性をもつ人ということである。こうして選ばれたケースは第7表の通りである。

以上のようにして設定された二つの群を用いて、得点の比較、応答傾向の比較をなし、問題ケースにあらわれるテスト結果を明らかにしようとした。

(2) 問題ケース群と非問題ケース群との比較の結果及び考察

得点の分布

問題群26ケースと対照群26ケースのE得点の分布をみると、第8表及び第3図の通りである。問題群の男子は3点から23点に得点のひろがりが見られ、女子はケースの数も少いが8点から21点のひろがりをもち男子よりも狭い。一方対照群については男子は1点から20点であり問題群とは大差ないようであるが20点を示す1ケースをのぞいては、すべて1点から

第7表 問題群，対照群ケースとその得点

問題 範疇の分類	問題群 (26名)			対 照 群 (26名)		
	個人記号	得点 E	点 L	個人記号	得点 E	点 L
1. 精神病的傾向	A	20	6	CA	8	1
	B	5	4	CB	1	6
2. 神 經 症	C f	16	3	CC f	12	5
	D	7	1	CD	6	4
3. 神 經 症 傾 向	E	5	9	CE	8	4
	F	11	4	CF	7	4
	G	17	2	CG	20	3
	H	10	5	CH	12	5
	I	21	4	CI	2	8
	J	8	5	CJ	6	4
	K f	15	6	CK f	5	7
	L	23	2	CL	5	2
	M f	21	6	CM f	4	5
	N	3	9	CN	14	7
4. 退 学 死 亡	O	16	2	CO	9	1
	P	11	2	CP	11	1
5. 相 談 を う け る	Q	12	3	CQ	6	8
	R f	20	3	CR f	4	7
	S	11	2	CS	15	4
	T f	9	2	CT f	6	5
6. 身 体 的 疾 患	U f	8	4	CU f	6	5
	V	4	5	CV	6	8
7. 反 社 会 的 行 動	W f	11	3	CW f	9	9
	X	3	5	CX	7	4
	Y	19	3	CY	13	5
	Z f	8	8	CZ f	8	7

15点に入っている。女子は4点から12点に分布している。この結果，得点の分布は，男女共に両群間の重なりは非常に大きくいくらか非問題群の方が低得点の方に偏っているようであるが，分布の上からの区別は殆んどつけ難いものと思われる。

中心傾向及びそのひろがり

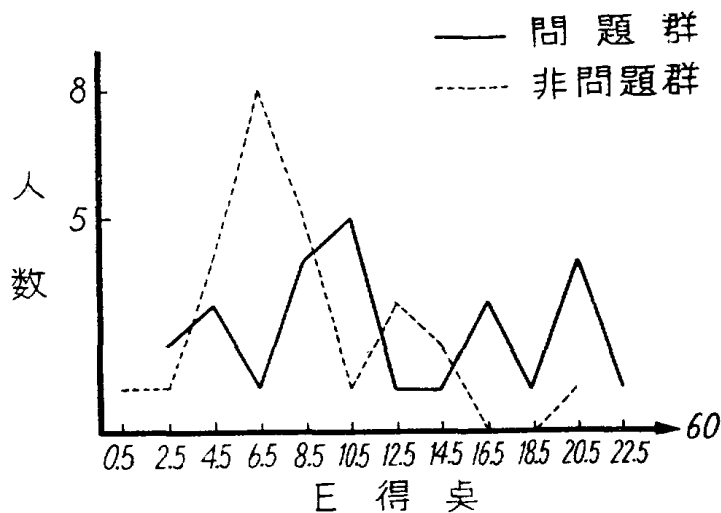
問題群と非問題群についてその平均点で比較してみると，問題群の平均は12.1点，対照群である非問題群では8.1であり，5%の水準でこの間の

差は有意とみとめられた。男子のみをとってみるとその差は明らかでなく女子のみでは有意差がみとめられた(第9表)。非問題群としての対照群の平均と全対象539名の平均との間には有意な差はみとめられず、ある操作を加えて設

第8表 問題群及び非問題群E得点分布

E得点	男 子		女 子		計	
	問題群	非問題群	問題群	非問題群	問題群	非問題群
22—23	1	0	0	0	1	0
20—21	2	1	2	0	4	1
18—19	1	0	0	0	1	0
16—17	2	0	1	0	3	0
14—15	0	2	1	0	1	2
12—13	1	2	0	1	1	3
10—11	4	1	1	0	5	1
8—9	1	3	3	2	4	5
6—7	1	6	0	2	1	8
4—5	3	1	0	3	3	4
2—3	2	1	0	0	2	1
0—1	0	1	0	0	0	1
計	18	18	8	8	26	26

定した対照群も、平均得点の上では限定された539名という母集団と異った特徴をもつものではなかった。但し、女子のみについては対照群は女子の全対象223名よりは低い得点を有するものから構成されているとみられた。これらのことから問題群がE得点において平均的には高得点を示すのではないかということが考えられた。しかしながら得点の分布の状態は、先にも指摘したように、問題群と非問題群との差を十分に示すものとは考



第3図 E得点

第9表 問題群及び非問題群（対照群）の代表値及び散布度

	男 女 と も			男 子			女 子		
	問題群 (26)	対照群 (26)	全対象 (539)	問題群 (16)	対照群 (18)	全対象 (316)	問題群 (8)	対照群 (8)	全対象 (223)
得点の範囲	3—23	1—20	0—31	3—23	1—20	0—31	8—21	4—12	0—22
中央値	11.0	7.0	7.6	10.8	7.5	7.5	13.0	6.0	8.0
平均値	12.1	8.1	9.4	11.4	8.7	9.6	13.5	6.8	9.5
標準偏差	6.1	4.2	5.4	6.5	4.8	5.6	5.3	2.8	4.8
平均の差の検定	$t=2.72^+$ $t=1.21$ $df=25$ $df=563$			$t=1.43$ $t=.70$ $df=17$ $df=332$			$t=3.19^+$ $df=7$		
	$t=2.48^{++}$ $df=563$			$t=1.05$ $df=28_{(13)}$			$t=2.13$ $df=7$		

+ 印 5%水準で有意 ++印 1%水準で有意

えられない。得点の範囲、標準偏差をみると問題群における得点のひらきは大きい。対照群、全対象については得点は10点内外に集中して分布する傾向があるが、問題群ではむしろ、得点の低いものから高いものまでを含むばあいが多いのではないかと思われる。このことは問題群では、個々のケースの多様性のために、個々の得点は巾の広いものになるのではないかと推測せしめる。

問題ケースと高得点との関係

高得点を一応平均 +2 標準偏差 ($\bar{X} + 2s_i$) を上回る得点と考える。この得点と問題ケースとの関係を見ることにした。男子については得点20以上、女子では、得点19以上が高得点とみなされ、高得点者は男子では316名中21名、女子では223名中13名あった。問題ケースはこの場合にかぎり範囲を先に集まったケース全部を考えることにした。第10表は、問題ケース中に含まれる高得点者の割合及び、高得点者中に含まれる問題ケースの割合を示したものである。高得点者のうち実際に問題があるとみとめられたケースでは男子は21名中6名(28.6%)、女子では13名中2名(15.3%)であった。集められた問題ケースの側からみると、その中で高得点を示したものは男子では32名中7名(21.8%)、女子では28名中3名(10.7%)にす

第 10 表 高得点ケース中に含まれる問題ケース*の数及び比率と、
問題ケース中に含まれる高得点ケースの数及び比率

	高得点問題ケース			問題ケース高得点ケース		
	高得点 ケース数	含まれる数	比率%	問題ケース数	含まれる数	比率%
男子	21	6	28.6	32	7	21.8
女子	13	2	15.3	28	3	10.7

*この場合の問題ケースは集められたすべてのケースについていっている。

ぎなかった。

これらのことは問題ケースが必ずしも高得点をとるとは限らないことを如実に示すものである。このことはまた、学生の不適応の予見にテストを用いることの困難さを示している。問題ケース中の大部分はいわゆる統計的判断から知られる高得点という範囲から見逃がされ、テストの結果から問題があるとしてとりあげられるケースの4分の3は、特にとりあげる必要もなく、なんとかやっけていけるというばあいが起りうることを示す。この識別の誤りはもしも高得点を前述のように考えるかぎり相当大きなものであり、特にこのテストを不適応ケースの選別に用いることを目的とするばあいには、どういう得点をもって問題ケースを表わす得点とするかということによって実際のケースからの検討を必要としてくる。ただしここで用いた問題ケースは問題としてとり上げられたという点でのみ、ケースとして取扱っているので、すべての問題ケースを包含しえたとは考えられないため高得点者の中には気づかれなかった問題をもつ個人が含まれていたかもしれない。少なくとも問題ケースを第三者の判定にまかせたことは、個人内部の鬱積する問題、緊張を見逃しているものと思える。

以上の限界は充分考慮に入れた上で、問題群とE得点との関係について一つの点だけはあげておきたい。設定された問題群では男女あわせて26ケースのうち、前述の高得点者は5ケースあり比率として19.3%にあたる。一方非問題群26ケースのうちの高得点ケースは1ケースであり、3.8%である。全対象539名についても高得点者は34名であり、6.3%にすぎない。

このことから問題群は高得点ケースを多く含みうるということは一応いえるのではないかと考えられる。

項目に対する応答の傾向

まず問題群と非問題群との応答で差のみられる項目を直接確率計算法により調べた。その結果、男子については、5%の危険率で、項目10, 16, 39, 47の4項目に両群間の差がみられた。女子については同じく5%の危険率で項目39, 40, 58の3項目に差がみとめられた。問題群、対照群の臨床的な差がそれ程厳密にとられていないことを考慮して、10%までをとると、さらに12, 41, 58（以上男子について）、6, 36, 38（以上女子について）の6項目がつけ加えられる。これらの11項目が少くとも問題群と対照群とを弁別しているものと考えられる。

次に比較的問題のはっきりしていた精神病あるいは精神神経症的傾向のケースについて応答する項目をみてみた。4問題範疇（第6表の1, 2, 3, 5の範疇のもの）17ケースについて、その関係した項目は42項目にわたっている。そのうち各カテゴリー中のケースの過半数が応答している項目は全部で27項目あった。これらの項目は、いわゆる神経症的な傾向をもつ問題ケースで選択的に応答される傾向があるのではないかとと思われる。この27項目はまた、問題群・非問題群の有意差項目を項目41を除いてすべて含むものであった。第11表は27項目と、前の項目分析の結果、問題群、非問題群の差異項目及び各カテゴリーで顕著だった項目の関係を示すものである。27項目中の1項目68は全対象539名についての非通過率と関係させたばあい、全対象の80.7%も応答する項目であり、青年期という時期にあたっている大学入学予定者の大部分にとっては、多かれ少なかれ、自分自身との戦いが問題にされているのではないかとと思われる。従ってこの項目が選ばれるということは、問題ケース独特のものであるとみることはできないのではないか。一方、68を除いた26項目のうち、12, 14, 18, 39, 47, 61の6項目は、全対象の80%以上、38, 58, 62, 63の4項目は90%以上の学生によって通過されたものであり、問題となりえなかった項目とみ

第11表 精神病及び神経症傾向ケースで応答に選ばれた項目

非通過率	項目分析の有効項目	問題群対照群有意差	応答のあったカテゴリー	項目
	++	F	P(N)	6 ささいなことをいつも気に病む
	++		N(N)C	7 人のいないさびしいところへ行って思う存分空想したい
	++	M	P(N)	10 人前ではすぐあがってしまう
+		M	P(N)	12 すぐに感情を害する
+			P(N)	14 気が小さくていつもくよくよする
	++		P	15 引込思案である
	++	M	P(N)	16 一日中何もしないでぼんやりしていられる
	++		P(N)C	17 物ごとにひどく凝る性分だ
+			PNC	18 とかく不平が多い
	++		(N)C	19 よく剛情だと言われる
	++		P(N)	33 気がきかないと言われる
	++		P(N)	34 この世の中をみにくいものだと感ずる
	++	F	C	36 外へ出ると、皆が自分を注意して見ているように思う
++		F	P	38 人々から自分の胸中を見破られていると思って心を苦しめる
+		MF	P(N)C	39 時々悪い考や恐ろしい考が頭の中に浮んで来てそれを払いのけることが出来ない
	++	F	(N)C	40 頭の中の考が駆けるように早すぎて言葉にあらわすことができない
+		M	C	47 卒直ということはいつでもよいことだ
	+		PC	49 私は他の人よりも敏感だと思ふ
	++		PC	57 私の行動の多くは周囲の人達の習慣に支配されている
++		MF	(N)	58 いつも自分が悪いこと間違っただけを感ずる
+			PC	61 人よりも精神を集中するのに困難なようだ
++			P	62 私の頭はなにかしらおかしい
++			P	63 私の家庭はよその家庭にくらべて家族間の愛情が非常に少い
	++		P	64 たいていの人には困難を切りぬけるためには嘘を言うだろうと思ふ
	+		P	65 私は大ぜいの人といっしょにいられるという理由でパーティに行くのが好きだ
-		(F)	P(N)C	68 私の最大の戦は自分自身に対してである
			(N)C	70 私は自信が強い
	++	M		41 多くのことを計画しすぎるためにすっかり疲れてしまう

非通過率 ++ 0—9% 項目分析 ++ 1%水準 問題群 M—男子
 + 10—19% + 5%水準 有意差項目 F—女子
 - 80%以上

応答のあったカテゴリー P—精神病傾向, N—精神神経症, (N)—神経症傾向
 C—相談を受けた

られる。のこりの16項目はすべて項目分析において有効項目とみなされている。このことは、いってみれば、神経症的傾向を示すケースの応答する項目は、一般の普通のケースではなかなか応答するような項目ではないのではないか。独特の項目に 応答する傾向をもつのではないかと考えられる。

そのほか、中途退学群についてはケースの数が少ないので、一般的傾向は分らないが、応答に関係した項目は 60 項目中 22 項目あり、5, 18, 31, 66, 68, 70 の 6 項目は 3 名のうち 2 名以上によって共通に答えられていた。項目66は、この群にみられ、前の神経症的傾向群にはみられなかった項目である。身体的疾患をもったケースも 2 ケースにすぎないので、なんともいえないが、二人の応答は項目68のみを共通として、あとは各々別々の項目をえらんでいた。特異な行動をする群の 4 ケースでは、応答は60項目中28項目にわたり、2人以上が共通して応答していたのは、16, 17, 19, 31, 33, 61, 66, 68, 69, 70 の10項目であった項目66と 69 は、神経症的傾向群にはみられなかった項目である。

以上の項目に対する応答の傾向を考え合せてみると、確実ではないが、このテストにおいて問題ケースは項目の選択にいくらかの特徴のある応答のしかたをするのではないかと考えられる。特に神経症的な特徴をもつケースはいくつかの項目に集中して応答が表われることを示している。この応答の傾向は、テストの総得点のいかんにかかわらず、あるケースに問題があるかどうかをうかがい知るひとつの手がかりを提供するのではないかと期待される。

問題群においてみられる応答の内容

問題群にあらわれやすい、あるいは応答が選ばれる項目のあることが分ったが、これをもとにして、すこし問題群の示した内容についても考えてみたいと思う。

第一の点は神経症的問題をもったケースの応答をみてみると一般に、退嬰的、自己批判的、繊細な傷つき易い感情をもつ、いわゆる内向的な性格

を示す項目が多くえらばれている。外界に対して積極的に働きかけるというのではなく、なにか引込み思案、回避的であり、感情も不安定である。気が小さくていつもくよくよと、ささいなことに気を病み、人前に出ればあがってしまう。すぐ感情が傷つけられる敏感な心の持主である。この感情の未熟さは主観性の強さということにも関係しているようである。そのためとかく不平が多く独善的で剛情なところがある。また自己に関係づける (self-reference) 傾向も強く (項目36,38など)、反面、自信 (self-assurance) の強さをもつことになり (項目70)、外界に対して客観的な評価をすることができない。これは表面的には人に対する不信の念となって回避的な傾向をもたせることになる。ところが感情的な未熟さは人を求める依存傾向をもつために、人への不信から起ってくる不安は自罰的な形で解決しようと試みる (項目7, 15, 34, 47, 64など)。また一方、一見自信の強さとは矛盾しているようであるが自己に対する不全感がつきまとい、容易に劣等感を形成することになり、外界に対して柔軟に対処できない硬さを未だもつために、なにか外界からの刺激があるとそれがたやすく結実因子となってパーソナリティを病的な状態に追い込むことになる。

この傾向は応答に表われなかったのこりのテスト項目にみられるような自己の中にもつ不安、葛藤が表現的に表われる傾向と明らかに対立して示されているようである。例えば、とかく不平は多くてもそれはぶつぶつ不平を言うという形では外面に表われてこない。感情はたやすく害されても、きむずかしい様子やむっつりした様子よりむしろ表面的にとりつくろわれている。感情にしろ考え方にしろ、外向的、攻撃的な形はあまり示されないのではないかと思われる。自己の内面に鬱積し、自己の中で思考し、悩む、という表現的でないかくされた自己の内部の動揺となっている。従ってこれらの悩みや不満は解発されるところがなく、解決のひとつの道は自己にその責を帰するという方向をとるために、ある契機によって緊張に張りつめたこの無理な内部的平衡が簡単に崩れていく危険性をもつことが推測される。

・ 第二に問題群の応答にみられることは、問題群の問題が、「自分の読むものが今までのようには理解できなくなった」「安眠できない」といったような神経衰弱状態を示すよりももっとパーソナリティ自体のもっている問題を示すように思われる。応答はそうした一過性の病的状態に対して応答するよりも、むしろ病的状態をもたらす人格内部の特徴そのものを示しているようである。

・ 一言でいえば、問題群の応答にあらわれたものはパーソナリティそのものについてのものであり、そのパーソナリティの特徴は、感情の未熟さ、不安定さであり、非現実的、回避的、主観的で、易感性、被刺激性をもつものであると思われる。これはまさしく神経症的人格 (neurotic personality) の定義に合致するものであり、問題群の示す特徴が神経症を起し⁽¹⁴⁾ やすい神経症的パーソナリティの特徴にきわめて近い形で示されるものであることが分る。このことは問題群のもっている問題の特徴を知ると共にこのテスト自体の問題としてもテストが単なる現在の状態を表わすというだけでなく、もっとパーソナリティそのものの特徴をも示しうることを示唆し、実用にさいしてテストのもつ意味が明らかにされると思う。

5. 今後の問題点

(1) 適応予測尺度としての情緒性検査

539名の大学入学予定者に施行した情緒性検査を統計的さらに問題ケースとの関連から検討をすすめてきたが、少なくとも現在までの結果からではこの検査によって心理的な原因に負う不適應の予測は完全には期待することはできない。情緒性のように人格の底流として存在するものを測定すれば、どういう面に問題が起るかということは分らないまでも新しい環境でうける刺激に対してどう反応するかについての可能性の測定が期待される。Woodworth 以来の一連のこの種のテストでは兵士、非行少年などのばあいには正常者と問題をもつ者との間に区別がつきうるという実際の妥当性がみとめられている。⁽¹⁵⁾ しかしながら、適応の予見となるとずっと困

難になってきている。特に学校においてカウンセリングを必要とする学生を見出すばあいでは Darley の研究(1937)⁽¹⁶⁾があるが、その他の研究でもテスト得点は単なる偶然以上の妥当性は示しうるが、誤りを犯す危険性もまた大きいことを指摘している。⁽¹⁷⁾最近では第二次世界大戦中、アメリカにおいて戦争神経症のスクリーニング・テストの作成が試みられているが、⁽¹⁸⁾ここでもこの問題をみとめている。

適応の予見の研究は、以上のように単に情緒性のみでなく、広く人格の全体の適応の様子からみようとしているものが多いが、必ずしも有効な結果は現在のところ得られていない。適応の主体の素地としての情緒性が果して後の適応を予測するものになりうるかどうかは、適応は予測しうるものだろうかという問題と相まって、それ自体、多くの検討を要するものと思われる。⁽¹⁹⁾更にそれを測定し得点として表わしたもののもつ意味となると測定というものの自体の制約も加わって果して臨床的な個々のケースの特徴をどの程度までとらえうるか疑問になってくる。この研究では以上のような制約にさらに研究の操作上の不備、すなわち不適応の概念の不明確さ、ケース選定の主観化、高得点ケースについての検討の不足、人格の他領域との関連についての検討の不足などで、情緒性検査と問題ケースとの関係を充分には明らかにしえなかった。残された問題として、今後このテストを適応予測の尺度として用いるばあいには、特に精度化の問題がとり上げられる。臨床的な意でもって問題ケースと非問題ケースを弁別しうる項目を設定し、得点の表わし方の工夫、特に？ 応答の処理を考慮し、L尺度との関連などを通して、今後このテストの精度化はすすめられうるものと考えられる。

(2) 情緒性検査による問題ケースへの洞察

現段階においては少くともテスト結果のとり扱い方によりある程度初期の目的を果しうる。それはこのテストをとおしての問題ケースの内容への洞察という点である。このテストの結果は表面的には得点の大小として表わされる。しかしながら単純に得点の大きいものは不適応ケースとなりう

ると考えることは誤りであり、また逆に低得点者間の問題ケースの見落しの危険性も大きいものである。このことはテストによる測定には多かれ少なかれつきまとう問題であり、テストを通して示される測定結果と、臨床結果との懸隔は測定あるいは **normative approach** と精神病医学的な **clinical approach** とのさけ難い対応を示すものではないかと考えられる。これをいくらかでもやわらげるために、また問題ケースの応答の傾向からもむしろこのテストの結果は広く応答の仕方から問題にしたいと思う。第一にこのテストによって大学生の情緒性のあり方を知ることである。学生のもつ情緒的問題とはどんな傾向のものか、あるいはある個人のもっている問題はその個人の特殊な問題なのか、一般的傾向としてあるものなのかを知る上の重要な一資料とすることである。大学生の情緒性の問題は早くは1927年に Bridges⁽²⁰⁾ によって Woodworth Psychoneurotic Inventory を用いての研究があるが、以上のような問題を把握しておくことは大学生の指導の上にある手がかりを提供するものと考えられる。第二には、ある個人のテスト結果の内容分析により、その個人のもっている人格の内部構造及び機制を明らかにすることである。それによって現行の多くのテストではどうしても充分にとらえることのできない人格の中の問題を、人格そのものの理解によって究明していくことができるものと思われる。たしかにテストは問題の存否を知る手がかりを与えるかもしれない。そこから臨床家によって個々人の全人格との関連において測定された事実が考察されなくてはならない。この情緒性検査の結果は未だ十分に問題ケースとの関連をとらえることはできなかったが、こうした統計的規準的な事実が、単に機械的にとり上げられるのではなく、個々人のケースにおいて、人格の適応のあらゆる相の下で臨床的技術を用いて解釈されるならば、漠然としてしかとらえられないような人間の問題を比較的明確につかむことを可能にし、人間の複雑な行動の問題に、より有用で価値ある **approach** を供するのではないかと期待される。

（最後に末筆ながら、この研究のために貴重な資料を快よく提供して下

さった多くの先生方に心から感謝いたします。)

註

- (1) N. Fenton, *Mental Hygiene in School Practice* (California : 1948) (依田編 教育心理学 東京 : 1955, 315頁)
- (2) 歴史的概況についてはP. M. Symonds, *Diagnosing Personality and Conduct* (New York : 1931), p. 174—214 及び沢田他編 人格の測定と診断 東京 : 1956, 149—185頁が詳細に扱っている。
岡部弥太郎「情緒性検査の作製及び改訂」教育思潮研究, 第五卷, 第四輯, 143—163頁, 1931.
牛島義友, 不良化傾向の早期発見—性格の評定尺度と検査法, 東京 : 1952.
- (3) 依田新編 教育心理学, 315頁
- (4) 矢田部達郎「性格自己診断検査の作製」京都大学文学部紀要, 第3, 1954, 142—160頁。
- (5) このテストでのL尺度の項目はミネソタ多面性性格テストからとられてきている。S. R. Hathaway and J. C. McKinley, *MMPI Manual Revised* 1951, (New York : 1951), p. 18, p. 23. 但し, 同上書18頁にも書かれているようにいくつかのケースではL尺度の得点はこれだけであるパーソナリティの特性を示す場合もあるといわれている。
- (6) J. P. Guilford, *Fundamental Statistics in Psychology and Education* (New York : 1956), p. 436.
- (7) Symonds, 前掲書, 164—167, 185頁。
- (8) Guilford, *Psychometric Methods* (New York : 1936), p. 417—418.
- (9) 岩原信九郎, 教育と心理のための推計学 (東京 : 1952) 331—334頁。
- (10) Guilford, 前掲書, 428—436頁。
Guilford, "The Phi Coefficient and Chi Square as Indices of Item Validity," *Psychometrika*, 6 : 11—19, (1941).
- (11) 最近, 学生問題研究所において大学生の不安についての基礎的研究と題して広範囲に亘る調査が試みられた。
学生問題研究所研究報告第1冊A, B「大学生の不安についての基礎的研究」, (東京 : 1959).
- (12) John G. Darley, "Tested Maladjustment Related to Clinical Diagnosed Maladjustment," *J. appl. Psychol.*, 21 : 632—942 (1939).
- (13) Helen Walker & Joseph Leu, *Statistical Inference* (New York : 1953), p. 155—158.
- (14) Cattell, R. B. の定義, 心理学事典 (平凡社) (東京 : 1957), 340頁。
Raymond B. Cattell, *An Introduction to Personality Study*, (London : 1950), p. 112—151.

- (15) Symonds, 前掲書, 186—188頁, 牛島義友, 前掲書, 156頁。
- (16) Darley, 前掲研究論文
- (17) Lee J. Cronbach, *Essentials of Psychological Testing*. (New York : 1949), p. 330—332.
Emily L. Slogdill & Minnie E. Thomas, “The Bernreuter Personality Inventory as a Measure of Student Adjustment,” *J. soc. Psychol.*, 9: 299—315, (1938),
- (18) Shireley A. Star, “The Screening of Psychoneurotic in the Army : Technical Development of Tests” in *The Study of Social Psychology of World War II*, Vol. 4, *Stouffer et al. ed., Measurement and Prediction*, (New York : 1950).
仮訳として任用局試験第2課, 「スクリーニングテスト (戦争神経症) の作製について」, 試験研究 (部内版), 第28号, 21—85頁, 1956.
- (19) J. A. McGeoch & P. C. Whitely, “The Reliability of the Pressey X-O Test for Investigating the Emotions,” *J. gen. Psychol.*, Vol. 1, 34 : 255—270, (1927).
L. F. Shaffer, *The Psychology of Adjustment*, (New York: 1936), p. 351—352.
続有恒「中学校卒業時の学校生活への適応の予見」名古屋大学教育学部紀要, 第3巻, 255—292頁, (1957).
村上英治, 江見佳俊「教育心理学的診断の予見性に関する追跡研究—一向性検査およびクレペリン検査について」名古屋大学教育学部紀要, 第4巻, 150—157頁, (1958).
続有恒, 増田末雄「教育心理学的診断の予見性に関する追跡研究—悩みの調査と適応性診断テスト」同上紀要, 163—168頁.
- (20) J.W. Bridges, “Emotional Instability of College Students,” *J. abnor. soc. Psychol.*, 22: 227—237, (1927).

(岡部 本学教授
古沢 大学大学院学生 [教育心理学専攻])